資源配分

滋賀大学経済学部　近藤 豊将

『資源配分』は、経済学のキーワードである。古い書物には、「経済学は、資源配分の学である」と書いてあるものもあるぐらいで、経済学における最重要概念といってよい。にもかかわらず、この言葉について得心のいく説明は、あまり見当たらない。

資源配分について理解するためには、当然であるが、「資源」と「配分」という二つの言葉を理解することが必要である。資源は resource、配分は **allocation** の訳語である。ここでは、資源配分 resource allocation について、その語源に立ち返るとともにいくつか例を用いて説明する。

まずは、資源の原語である resource について、その語源を説明することから始めよう。接頭語の「re」が、「再び、何度も」という意味を表すことは、多くの人が知っているだろう。例えば、リサイクル(recycle)は、再びサイクル(cycle；循環）の中に組み込むことである。つづく語根「source」は、最近では、情報のソースという使われ方もしている通り、物事の源（みなもと）を表す。したがって、資源 resource は、**そこから何度も何度も富（価値のあるもの）が生み出されてくる源**という意味である。

配分 allocation の接頭語にあたるのは、「al」の部分である。これは、「ad」が変形したもので、前置詞 to に相当するラテン語に由来する。よって、この接頭語「ad、al」は、「～に向けて、～の方へ」という意味を表す。例えば、「adjust」は、「正義(justice)の方へすり合わせる」というニュアンスで「調整する」という意味になる。（この単語は、その成り立ちから、悪い方へ忖度（そんたく）して調整する場合などに使うのは不適切である。）

他方、allocation の語根は、場所を意味する「location」（ロケーション）である。したがって、allocation という単語は、「その場所の方へ」という意味を暗示しており、要するに**場所を指定すること**である。

以上から、資源配分とは、**富を生み出す源に対して、場所を指定してそこに配置すること**である。以下、いくつか例を挙げながら、説明を加える。

例１． はじめに、ある**会社における**資源配分問題を考えよう。この会社には A さん、B さん、C さん、D さん、E さんの 5 人がおり、役職は社長、副社長、事務、営業担当二人分があるとする。業務を遂行し利益をあげていくにあたり、資源、つまり富を生み出す源にあたるものは何か？ もちろん、5 人の社員である。ここでいう富は会社の利益であり、それを生み出してくれるのは 5 人の社員に他ならない。そして、場所に対応するのが 5 つの役職＝ポストである。この場合の資源配分問題は、5 人（資源）それぞれに対して、社長、副社長、事務、営業という役職を指定（配分）することである。図 1 のように、A さんには副社長、B さんには社長、C さんと D さんには営業、E さんには事務という役を割り振るのは、ひとつの資源配分である。

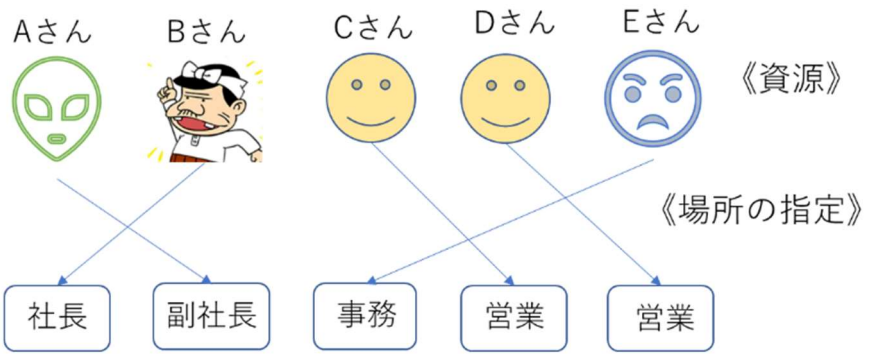

図 1

もちろん、他にも（実現可能な）資源配分（各社員に対する役の割り振り方）は何通りもあり、その中には望ましいものとそうでないものが存在する。口下手な人に営業、ずぼらな人に事務職を指定するのは望ましくないだろう。各役職に対して適した人材を配置するならば、利益を高めることができるであろう。それでいいのだ。この例の場合の望ましい資源配分問題は、人材の**適材適所**である。これに失敗すると、利益は上がらず会社は沈む。この事例だけからでも、資源配分がいかに重要かわかるだろう。

例２． 次に、**一国全体**の**生産**に関する資源配分問題をとりあげる。ある国には生産に携わる人が 1000 万人いるとする。（他にも、子供や老人などの生産活動に携わらない人も多数いる。）この 1000 万人で手分けをして、農産物、工業製品、教育サービス、医療サービスを生み出し、全国民の生活を支えなければならない。この場合、資源（富を生み出す源）は 1000 万人の労働者であり、この人たちに対して職業を指定することが資源配分である。各労働者の適性に配慮するとともに、どの仕事に何人ずつ配分するかも決めなければならない。図 2 にあるように、農業、工業に 300 万人ずつ、教育産業と医療にそれぞれ 250 万人､150 万人を割り当てるのはひとつの資源配分である。この場合、資源配分の望ましさは、どの財やサービスをどれだけ生産するべきかに依存し、それは国民の年齢構成や選好（好み）によって決まってくる。

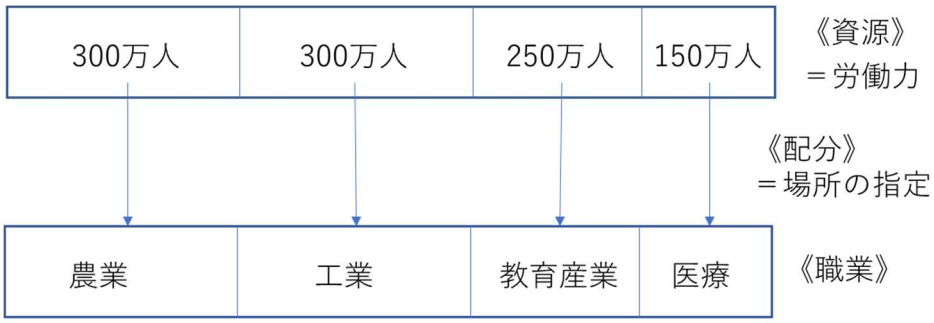

図2

例３．個人の**消費**に関しても、資源配分を考えることができる。ある人は一月あたりの収入が 30 万円で、これを家賃、食費、衣服の購入、遊興費、貯蓄にあてているとする。このときの資源は 30 万円の予算であり、それを各用途に割り振ることが消費に関する資源配分である。

例４．社会全体としての**所得分配**も資源配分の一種とみなすことができる。所得分配について説明するために、次のような状況を考えよう。あなたは 16 世紀のヨーロッパに生きており、いま、船長として 100 人の部下を従え、インドで香辛料を買い付けスペインで販売することによって 100 万ペソの利益をあげたところである。部下の中には、航海の途中で海賊を撃退してその頭目を血祭りにあげた武闘派、目的地インドで商談をうまくまとめた知性派、そして船の清掃や食事の支度などで中心となってくれた人や会計記録をつけてくれた人もいる。これから 100 万ペソの利益をあなたを含むメンバーで山分けして、このプロジェクトは終了する。各人の取り分はどれだけになるだろうか、またどうなるべきか？ これが所得分配(income distribution)の問題であるが、(100 万ペソの) 利益に対してその引き取り手を指定するというタイプの資源配分問題でもある。船長であるあなたが利益の大半をぶん取り、部下から搾取する資源配分（所得分配）もあり得るが、それでは武闘派に殺される。このようなときは、次の機会にまた仕事を与えることを匂わせて反逆をおさえつつ、なるべく自分の取り分を大きくしたいところだろう。

以上、4 つの例を挙げて資源配分について説明した。このような例はいくらでも作れるし、追加すべき説明にも限りがない。まさに、資源配分問題は、経済学そのものなのである。ただ、近年の経済学の書物では、この視点はやや希薄な気もする。久しぶりに古きを温め、資源配分の学として、統一的な視点から経済学を俯瞰（ふかん）する書物が現れてもよいころかもしれない。

（令和２年８月）

参考文献

１.『語源でふえる英単語』山並陞一（ジャパンタイムズ）
２.『連想式でみるみる身につく語源で英単語（増補改訂版)』清水建二（学研教育出版）
３.『語源ですぐに覚える Quick 英単語』石川勝弘（明日香出版社）
４.『MINI-MAX 英単語倍増計画（パワーアップ版)』薄井明（郁文堂）